

# 白藍塾オリジナル

## 2020入試小論文分析&解答のヒント

2020年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・看護医療学部

今回の課題文は、近年の中ではかなり専門的な内容になっている。前半は、加齢や認知症に伴う認知機能の低下には個人差があること、そして「認知の予備力」や「脳の可塑性」によって認知機能の低下を予防できることが説明されている。そして、後半では、そうした予防のための認知訓練（脳トレ）には実際はほとんど効果がなく、訓練と関連した能力が改善されるだけで、認知機能全般が改善するわけではないことが説明されている。

問題1では、下線部1)「認知症の症状の程度や加齢に伴う認知機能の低下に、個人差がみられる」理由を、本文をもとに説明することが求められている。

これは、下線部を含む段落の次の段落（第3段落）から第7段落までの内容をまとめるつもりで答えればよい。「認知の予備力」と「脳の可塑性」についてそれぞれ説明すれば、それが答えになる。

問題2では、下線部2)「脳トレの点数が数点あがることは、日常生活の物忘れが一つなくなることを意味しない」ことの理由を、「効果の転移」の概念を用いて論じることが求められている。

「論じる」とあるが、下線部2)の理由は課題文の中でくわしく説明されているので、これは事実上説明問題と言ってよいだろう。「効果の転移」というのは、訓練の効果が訓練対象以外の課題のパフォーマンスに影響する、というもの。課題文にある例で言えば、英単語や英文法をしっかりと学習すれば、その上位にある、書く・聞く・話すという技能の向上につながる。しかし、脳トレにうまく答えることと、物忘れをしないようにするといった日常生活における認知機能とは、別の脳部位を使って行う活動なので、訓練効果の転移が起こらず、そのためいくら脳トレをがんばっても日常生活の認知機能の低下は予防できないというわけだ。

ただし、そうしたことを説明するだけなら、おそらく200字ですんでしまうだろう。課題文にない具体例などを自分なりに考えて、なんとか字数を埋めるしかない。4部構成だと書きにくいので、2部構成のA型かB型を使ってまとめるとよい。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://www.hakuranjuku.co.jp>